

学生相談カウンセラーの困難に関する探索的研究

著者	坂本 憲治
雑誌名	川口短大紀要
巻	27
ページ	109-122
発行年	2013-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000352/



学生相談カウンセラーの困難に関する 探索的研究

坂 本 憲 治

要 旨

本研究の目的は、学生相談カウンセラーが業務上直面する困難について明確化し、今後の研究に示唆を得ることである。学生相談カウンセラーの主観的体験を得るために、公刊された図書や論文など複数の素材を用いて質的研究を行った。その結果、《組織》《実践》の2領域からなる困難の構造を見出した。各領域を構成する困難カテゴリは、《実践》：「枠組みのゆるさと青年期臨床のはげしさ」「個別支援か組織的支援かの葛藤」「教職員の理解を得る難しさ」、《組織》：「学生相談機関としての未成熟さ」「事務系・非常勤カウンセラーの動きづらさ」「教育・研究活動の成果を示す難しさ」であった。学生相談カウンセラーの困難は、これら2つの領域が重なり合う教職員との学内連携活動において際立つと考えられた。また、《組織》に伴う困難な体験は、学生相談カウンセラー自身が、自らの置かれた状況と‘理想的な’学生相談機関の姿との乖離を意識することによって増大する可能性を指摘した。今後は、カウンセラーの組織的立場に着目して、困難とその対処方略を明確化することが課題である。

キーワード：学生相談カウンセラー，困難，対処

1. 問題と目的

(1) 職業的発達における困難の重要性

学生相談は心理臨床学を基礎としながらも、理念と方法に独自性を有する実践領域である（都留ら，1994；齋藤，1999）。近年，学生相談領域の発展は目覚ましく，2000年以降に出された報告書（日本学生支援機構，2000・2007）を皮切りに，日本学生相談学会によって学生相談ハンドブック（2010）や学生相談機関ガイドライン（2013）が編集され，多くの学生相談カウンセラーがより身近に学生相談の理念や使命を知り，実践できるようになった。それらの知見によると，学生相談カウンセラーは高等教育機関に所属する「教職員」という立場から，教育的使命を達成することを目的として‘成長・発達支援モデル’を志向し，困難を抱える学生への個別支援から健康度の高い学生まで，大学コミュニティに所属する全学生・教職員を対象とした全学的支援を展開することが期待されている。

このような役割を果たす学生相談カウンセラーは、心理臨床家とは異なる、固有の職業的発達が見込まれる。学生相談カウンセラーの職業的発達プロセスを検討した坂本（2012）は、発達段階を参入期・探索期・確立期に分けた。確立期の職能として「教職員との連携・協働態勢」「成長・発達支援への志向性」「予防的発信による大学コミュニティ支援」を見出している。学生相談カウンセラーの職業的発達は「心理臨床家としての発達」（Skovholt & Rønnestad, 1992・1995）が直線的に進むわけではなく、「大学教職員としての発達」との相互作用によって進み、最終的には「心理臨床ができる教職員」というアイデンティティを獲得するに至る。しかし、職業的発達を促進する要因としては、心理臨床家と同じく、職務上、直面する困難に対して専門的な内省を行い、継続的に対処するプロセスが重要であるという（坂本, 2012）。心理臨床家の困難は、対処に失敗した場合、機能低下やバーンアウトを引き起こし、クライアントに否定的な影響を与える可能性がある（Corey & Corey, 1998）。そのため、倫理的実践の観点からも解決すべき重要な課題である。

（2）心理臨床家の困難

心理臨床家の困難に関する先行研究を概観すると、「心理療法関係の困難」、「心理臨床家個人の困難」、「社会・経済的困難」の3つに大別される。「心理療法関係の困難」は、主にクライアントとの二者関係によって生じる困難である。強い精神病理や抵抗、自殺をほのめかす発言、敵意や攻撃性（Farber & Heifetz, 1981）、クライアントに対する恐れや怒り、性的感情（Pope & Tabachnick, 1993）などがある。「心理臨床家個人の困難」は、セラピスト自身の欲求や感情によって生じる困難である。心理臨床家のライフイベント（Corey & Corey, 1998；岩壁, 2007）や心身の疲弊、親密さと自製の葛藤（Farber & Heifetz, 1981）、クライアントに対する責任感（Stevanovic & Rupert, 2004）、成功欲求（岩壁, 2007）などがある。「社会・経済的困難」は、心理臨床家の社会的地位や生業としての側面から生じる困難である。心理療法に適さない労働条件（Farber & Heifetz, 1981）や心理療法の商業的側面（Kramen-Kahn et al., 1998）、経済的な不確実性や見通しの立たなさ（Stevanovic & Rupert, 2004）などがある。

日本の心理臨床家を対象とした困難に関する研究は少ないが、代表的な調査研究としては岩壁・金沢（2006）がある。この調査はOrlinskyら（1999）の質問紙（DPCCQ: Development of Psychotherapist Common Core Questionnaire）を邦訳し、困難に直面したときの対処方法や心理臨床家の自己評価に影響を与える要因について検討した。因子分析の結果、心理臨床家としての自己に対する疑念と失意を示す「職業的自信の喪失」、困難なケースへの対応の難しさを示す「苛立ちを覚えるケース」、逆転移反応を示す「ネガティブな個人的反応」という3つの困難を見出した。「職業的自信の喪失」は「心理臨床家個人の困難」であり、残りの2因子は「心理

療法関係の困難」に該当する。岩壁・金沢（2006）はこの結果と 20 カ国の心理臨床家から得られた結果とを比較し、かなり近似していることを報告している。この研究では、「社会・経済的困難」は因子として抽出されなかったが、初期キャリアにおけるリアリティショック（岡本，2007）や雇用不安（乾，2006），非常勤職の将来の見通しの持てなさ（田所ら，2004）などはその他の研究が指摘しており、日本においても同様の困難が想定される。

（3）学生相談カウンセラーの困難

学生相談カウンセラーの困難に焦点づけた先行研究はみられないが、日本学生相談学会による「学生相談機関調査」は参考になる。この調査は、高等教育機関における学生相談機関の設置状況やその組織のあり方、活動の実態に関する基本的データの定期的な把握を目的として、1997 年から 3 年に一度実施されている。2009 年度調査の自由記述「相談機関の課題」を分析した内野・森田（2012）は、学生相談カウンセラーの課題意識を以下 4 つに分類した。①学生相談機関スタッフ体制の充実（専任カウンセラーの配置など）、②学生相談機関の組織・運営基盤の整備（学内における学生相談機関の組織の位置づけや役割の明確化など）、③相談・援助体制の整備・充実（開室日・相談時間の拡充など）、④学生相談機関の活動の充実（教職員や学外他機関との連携・協働関係の構築など）。このうち、学生相談カウンセラーの困難に関わる下位項目をみると、カウンセラーの職位・雇用形態など組織的身分の不安定さ、非常勤者が多いことに伴う業務継承性の問題、学内の組織的位置づけの不明確さなどが挙げられる。これらは、学生相談カウンセラーが発達初期において経験する「学生相談構造への困惑」「組織的立場をめぐる葛藤」（坂本，2012）とも関連の深い困難である。学生相談カウンセラーの困難を考えるうえでは、組織的感受性の高さが大きな影響を与えていることが推測されるが、困難の具体的内容や発生機序は不明確である。困難への対処方略を探るためにも、その解明が必要である。

（4）本研究の目的と困難の定義

本研究の目的は、困難の具体的内容やその構造を探索的に明らかにし、今後の研究に示唆を得ることである。学生相談カウンセラーの困難は以下のように定義する。「大学組織において相談活動を展開する際、学生との関係性や支援構造を維持するうえで否定的な影響を及ぼし、それが解決されないと、中・長期的にも学生に不利益をもたらす臨床的、個人的、社会・経済的な要因」。

2. 方 法

(1) 研究法と質的素材

探索的な研究であることから質的研究法を採用した（能智，2011）。質的データの素材には、公刊されている図書「学生相談シンポジウム」（鶴田・斎藤，2006）と、学生相談研究に掲載された12名分の「私の学生相談」を選択した。

表1 日本心理臨床学会 自主シンポジウム題目

1996年	学生相談室の「紀要」「報告書」に何を書くか
1997年	学生相談研究におけるキーワードとの出会い
1998年	学生相談の面接構造の特徴
1999年	「学生生活サイクル」から見た学生相談
2000年	学生相談で語られる学業と研究の話題
2001年	21世紀の学生相談を展望する
2002年	学生相談で語られる進路の話題
2003年	学生相談の特徴を伝えるための事例研究
2004年	学生相談における連携について
2005年	学生相談機関を事例研究する

「学生相談シンポジウム」は、1996～2005年の10年間に渡って行われた、日本心理臨床学会の自主シンポジウムのライブ記録である。この図書は、各回のシンポジウムセッション（表1）をテープ起こしした後、各シンポジストが校正した原稿をもとに、編者が全体の構成を考慮して編集が進められたものである。シンポジスト・指定討論

者・司会者・フロアからの発言は、基本的に語られたままの形で記載されている。編者らはこの図書を「学生相談の現場感覚にあふれたカウンセラーたちのライブセッション」（p. iv）と位置づけ、「あたかもその場にいるかのごとく、臨場感と親しみを感じながら学生相談の深みに浸っていただければと期待して」（p. 260）出版したと記載している。この素材を選定した理由は、時代の潮流に合った学生相談領域に重要なテーマが選択されてきたこと、それに基づいて学生相談カウンセラーの生の声が口語体のままに記録されていることから研究目的に沿ったデータが得られると判断したからである。

「私の学生相談」は、学生相談研究に掲載された展望論文である。この素材は、著者それぞれが大切にする学生相談の姿を、各自の切り口から自由に記載しており、学生相談機関やカウンセラー自身の発達についてまとめた文章である。シンポジウムのような公の場では発言されにくい内省過程など細やかな主観的体験を記載しているため、「学生相談シンポジウム」を補完するうえで適切な質的データと判断した。本研究では、学生相談研究23～29巻に掲載された「私の学生相談」13論文のうち、筆者を含む3名の学生相談カウンセラーによって主観的体験の記述が得られると判断された12論文を分析対象とした。

(2) 分析手続き

質的分析は、KJ法（川喜多，1970），および佐藤（2008）の質的データ分析を援用し，以下の手順を経た。

まず，「学生相談シンポジウム」および「私の学生相談」から，学生相談カウンセラーの困難に関する発言を1つの意味のまとまり（コード）として抽出し，内容を端的に示すコード名を付した。1つのコードは，短くて1行程度，長い場合は数行に渡った。その後，共通するテーマをもつコードを集め，上位概念となるカテゴリの生成を進めた。

次に，上記において特徴的であった困難について，学生相談カウンセラーのより深い主観的体験を得る目的で，匿名・郵送法による質問紙調査を行った。この作業は，公刊された図書・論文以外のデータ収集法でも同様の結果が得られるかどうか確認するトライアングレーション（能智，2011）のプロセスでもある。

全データを用いて総合的に分析する際，筆者とは別の学生相談カウンセラー2名に，困難の定義や分類方法について説明し，妥当性を検討した。意見の相違がある場合にはカテゴリ名や全体の分類を検討するなど，合議による解決を図った。

3. 結 果

質的分析を通して，「学生相談シンポジウム」65コード，「私の学生相談」24コード，合計89コードを抽出した。暫定的な分析を経て6カテゴリを生成し，それらは《組織》《実践》の2領域に分類することができた。

次に，暫定分析の結果を踏まえて，多肢選択式質問と自由記述からなる質問紙を作成した。質問紙は，①組織的立場が実践活動に及ぼす影響，②学内連携・協働に伴う難しさ，具体的なケースに関する自由記述を中心とした。学生相談カウンセラーの研修の場である学生相談セミナー（日本学生相談学会主催）の会場において，切手付返信用封筒を同封のうえ2011年3月上旬に配布した。質問紙のフェイスシートには日本学生相談学会推進研究の一環で実施することを明記し，実施においては，日本学生相談学会の研修委員長に許可を得た。質問紙110部を配布したところ21名から返送を得た（回収率19.1%）。そのうち，①組織的立場が実践活動に及ぼす影響，②学内連携・協働に伴う難しさや具体的なケースの設問について自由記述が得られた17名を分析対象者とした。対象者の内訳は，女性15名・男性2名，非専任12名・専任5名，事務系12名・教員系5名，私立14名・国立3名，平均年齢40.1歳（SD = 8.76），心理臨床歴12.8年（SD = 9.5），学生相談歴7.5年（SD = 7.5）であった。自由記述から抽出した41コードを暫定

カテゴリに追加して質的分析を進めたところ、「教職員の連携意識の差異」や「連携すべきかどうかの見きわめ」といった下位カテゴリが補強され、非専任の立場における否定的影響など、本音で語られにくい内容も得られた。この作業によって新たなカテゴリが発生することはなく、カテゴリの安定性が確認された。

質的分析の最終結果を表2・表3に示す。以下、領域《 》，カテゴリ【 】, 下位カテゴリ〈 〉と記す。

《実践》の困難は、以下3カテゴリであった(表2)。【枠組みのゆるさと青年期臨床のはげしさ】:〈学生の行動化による疲労困憊〉〈問題の多様性〉, 【個別支援か組織的支援かの葛藤】:〈学生相談構造への困惑・葛藤〉〈連携すべきかどうかの見きわめ〉〈連携できない学生を抱える〉, 【教職員の理解を得る難しさ】:〈教職員との連携意識の差異〉, 〈他業種に専門性を伝える難しさ〉, 〈現場職員とのぶつかり合い〉。

《組織》の困難は、以下3カテゴリであった(表3)。【学生相談機関としての未成熟さ】:〈非専門家の上司・運営委員〉〈人員不足〉〈学内的位置づけの曖昧さ〉, 【事務系・非常勤カウンセラーの動きづらさ】:〈事務系カウンセラー:職位による動きづらさ〉〈事務系カウンセラー:部署異動の対象〉〈非常勤カウンセラー:モチベーション低下〉〈非常勤カウンセラー:組織全体の見えづらさ〉〈私立大学, 非常勤カウンセラーの雇用問題〉, 【教育・研究活動の成果を示す難しさ】:〈実践を文章化する苦労〉〈事例・研究発表のしづらさ〉〈教員系カウンセラー:臨床と研究の両立〉〈学生相談の成果を示す難しさ〉。

質問紙による郵送調査のうち、「現在の組織的立場があなたの学生相談活動に及ぼしている影響はどのようなものですか?」への回答を表4に示す。非専任カウンセラーからは、「モチベーション低下」「発言権の弱さ」など否定的な回答が目立ったのに対し、専任カウンセラーからは「発言権があり、大学組織にアプローチできる」など肯定的な回答が得られた。

4. 考 察

本研究では段階的な質的研究を通して、学生相談カウンセラーが直面する困難な体験のカテゴリを明らかにし、《組織》《実践》という構造を見出した。特に、いくつもの困難が《実践》に集約されることなく、《組織》との二峰構造によって示されたことは特徴的であった。以下、心理臨床家の先行研究と対比させながら、学生相談カウンセラーの困難の特徴をまとめ、今後の課題について考察する。

表2 《実践》領域における困難カテゴリー

領域	カテゴリ	下位カテゴリ	コード例	コード数	割合
実践	枠組みのゆるさと青年期臨床のはげしさ	学生相談構造への困惑・葛藤	苦勞した点は、コミュニティ全体がクライエントであるということ。〈中略〉全体がクライエントとは言うものの、非常に焦点が定めづらい (S) / 精神分析のトレーニングを受けて、治療構造や中立性を厳しく言われ、学生相談に入ってから深刻な葛藤を持っている (S) / 相談料が無料であることによるお互いの甘え、「卒業」という時間的制約があること、一杯だからといって来室する学生に待ってもらってはできないこと等々、それまで経験したことのない難問も少なく分かった (W) / 筆者は、このままでいいのだろうか、という不安全感や焦りを感じるようになった。援助を必要とする学生のうち、自分から相談室を訪れるのはその一部に過ぎないと思われただからである (W) / 同じ相談機関に属しているカウンセラー同士でも守秘義務があるから話せないという例も聞きました (S)	21	22%
		学生の行動化による疲勞困難	当時、教職員の自宅住所・電話番号が記載された名簿が全学生に配布されていたため、B子からは深夜にも度々電話がかかってきた。星夜を問わず対応していた私は疲弊し、やがて階段から足を踏み外して怪我をするなど限界状態となっていた。そんなある日、B子の母親からの電話で、数時間にわたって激しい非難と罵倒を浴びせられ、翌朝とうとう私は起き上がれなくなった (W) / 自殺の問題を抱えた学生への危機介入があった日にはかかってくる電話のおびえ、近づく救急車のサイレンの音で胸がドキドキした (W)	4	
		問題の多様性	新興宗教や悪徳商法、ストーカー、ネット依存、“OD”や“自傷ラー”など、時代とともに浮沈する最新の社会的現象とも必ずつき合うことになる。縦横、内外にアンテナを伸ばしておかねばならないこの緊迫感は、大学というコミュニティの中で行われる臨床の世界独特のものである (W) / 学力低下、大学の現実と社会の現実とに直面しながら支援するもどかしさ (F)	3	
		連携すべきかどうかの見きわめ	連携先がどの程度、不安を抱えられるか、衝動性を抑えられるかなど短時間で見極める難しさ (F) / 就職課同行など検討したが依存のリスクについて考え、結局は本人の力を支えた (F) / 学業指導について連携を考えたが、依存リスクに懸念がありなかった (F) / ケースの性質として学生の依存を強めないか、必要性を見極める難しさ (F)	5	
	個別支援が組織的支援からの葛藤	連携できない学生を抱える	学生が、自傷や自殺念慮の問題を抱えてやってくる、まず親に連絡しなくてはいけないとか、医療機関につながらなくてはならないと考えるが、しばしば学生は嫌がります。〈中略〉するとそこで「どうすればいいんだ」と頓挫してしまうわけですが (S) / 事実を知っているのに伝えられないのはもじもじのことがあった場合の責任を取るのが怖いことであり、どこまで学生を信頼し、罰えられるかの戦いでもあった (W) / 希死念慮のあるパーソナリティ障害学生。大量服薬などの行動化もあったが、本人が連携を望まず、〈情報か〉もれたときのリスクを考えて面接のみで対応した (F)	12	29%
		教職員の連携意識の差異	教職員の方々は、比較的早期解決を求めて、連携をとられることが多いのに対し、こちらは個人を尊重する形で、時には退学を促すような形で対応を行うこともある。つまり、当局側のニーズと異なることもあります (W) / 他部署から連絡がある際は来談の有無についてのみであり、今後の対応について共に考えていくという姿勢がまだ確立されていない。課題であると感じる (F) / 一致して対応したい時に、なかなかまとまり切れない時 (F) / カウンセラーは秘密主義という信念を持った教職員や役員：こちらからの働きかけに無反応 (F) / 大学教員の学生支援、連携に対する苦意思識、理解不足 (F)	18	
		他職種に専門性を伝える難しさ	「カウンセリング、ご苦勞様、お医者様ですか？」と未だに学内の関係者から言われることがあり、どう我々の独自性をアピールしていくかが課題です (S) / 理論的に私たちの専門性と必要性をどう訴えていくかということです (S) / 〈大学の広報原稿に〉カウンセラーが、「大学院生、もうちょっとなんびりやろうよ」という文章を書いたら、メールで「あなたは大学院生の恥だ」みたいなメールが返ってくるような大学です (笑)。なかなかカウンセリングセンターからの働きかけは難しいところがあります (S)	10	
		現場職員とのぶつかり合い	現場の職員の方々との関わりの中で、ささいなことでもぶつかってしまいうこともありましたし、説明しているつもりでも、こちらの意図が十分伝えられないという無力感を感じたこともありました (S) / 「話してはわからない」「話せばこじれる」という相手がいます。〈中略〉お前とは口を聞かないと言われたりして、嫌な思いもしましたが、それも仕方ないと思っています。〈中略〉一生懸命連携しようとしているけれど、連携できないことになってありますよね (S)	4	
	合 計			77	59%

〔註〕コード例の文章末尾の記号は、(S)：「私の学生相談」、(W)：自由記述からの抽出を示す

表3 《組織》領域における困難カテゴリー

領域	カテゴリ	下位カテゴリ	コード例	コード数	割合
組織	学生相談機関としての未成熟さ	非専門家の上司・運営委員	運営委員会を作ったことによって、分かっていただけたようになっていきましたが、反面、いろいろな先生が持ち回りのような形で委員会に入っている中で、学生相談についてほとんどご存知なかったり、まったく異なった認識をもっていらっしゃる先生もおられました (S) / 上司の理解がなく、心理を信用していないし、人を理解できない発達の遅い人が長にいらっているんで、仕事にならない (F)	6	11%
		人員不足	大学側には、一般教員を兼任カウンセラーで使えばいいという考えがあり、いかに専門カウンセラーの相談時間を増やすかで苦労しています (S) / 私は、授業でいえば3コマ勤務、もう一人のカウンセラーが6コマ (2日) 勤務で、1万6千人を相手になってきました。とても大変で (略) (S) / 一人職場の困難 (F)	5	
		学内的位置づけの曖昧さ	最近の難しさは、認められることによる難しさですね。今まで私たちは、認められない中でがんばるという形で、自立性をもってきていたわけですが、ある程度相談室とか学生支援が認められてくると、教育との境がわからなくなってきました。学生相談の本質をどのように考えていくかが課題になります (S) / 相談室の組織的な位置づけ、職位・人数・雇用形態などの体制が困難に影響している (F)	3	
		事務系カウンセラー：職位による動きづらさ	一般に、事務系カウンセラーの場合は、大学運営に関わる情報や人事異動、保護者や担当教員に対する説得力などの問題に不都合が考えられます (S) / 大学そのものを動かすことは、職員として組織の中にあるとなかなか難しい部分があります (S) / (事務職員なので) 臨床心理士として力をつけていけるかなと思うと空しくなったりもした (W)	4	
		事務系カウンセラー：部署異動の対象	この配置換えにより、(個人的な話になりますが) 私自身の職場環境が以前より相談活動を行うには難しくなってきたことから、学生相談部長に向けて意欲喪失状態に陥った時期がありました (S) / 毎年巡回実施される人事異動の時期には、もし突然の異動があったら、それまでの研修等が無駄になるかと思うと空しくなったりもした (W)	3	
	事務系・非常勤カウンセラーの動きづらさ	非常勤カウンセラー：モチベーション低下	どの仕事も10年近く続けるとそれなりの自分の意見や、もし専任であればやりたいことが生まれてくるので、私はそのやり場のないさを「非常勤疲れ」と呼んでいた (W) / (これまでも非常勤であったが) 専任カウンセラーとして公に認められることが、仕事に向きあうことでこれほどの原動力を生み出すのだということ、我がことながら改めて痛感した (W)	5	14%
		非常勤カウンセラー：組織全体の見えづらさ	(大学の相談室のあり方を再検討する動きについて) このような動きは、囁かされている限りほとんど内部事情は分かりません (S) / 非常勤の場合、全体が見えないので、自分で作っていくことは困難だと思います (S)	3	
		私立大学、非常勤カウンセラーの雇用問題	国立では専任カウンセラーがたくさん出てきて、それを複数にしよという動きも多いんですが、私大では、非常勤だけで悲観苦悶している大学が少なくありません。歴史が長いほど難しい問題もあって、時々無力感にさいなまれます (S) / 部局ごとの採算性がしばしばは組上に乗せられる私立大学で、(中略：教員ポストの所属が決まらない)。学生相談カウンセラーを“専任化”するととなったら、教員か、職員か、第3の職種を作るか、の問題が立ちはだかるのは、私学では現在もあり変わらぬ現実であろう (W)	3	
		実践を文章化する苦勞	私と大学との関係というのは、かなりデリケートな問題もあるから、論文としては書きにくい (S) / (実践活動を論文化した文脈で) かなり抑えて書いて書いたんですが、その時の思ひつらみ、欲求不満、いろんな感情が今読み返してみると行間から湧々と感じられて、ああ恥ずかしいものを書いてしまったと、ちょっと後悔している (S) / 論文として、私たちの思いも辛い部分も含めた表現や言葉が見つけられるかどうかは勝負をかけたさを得ない。それがどれだけできているかとなると、心もとないです (S)	6	
		事例・研究発表のしづらさ	(事例論文の事例の取り上げ方についての文脈) 守秘義務の問題と、論文としての明白さ、生野歴等の詳細さについて、ずいぶん考えました。で、できるだけあっさりとして書くことにしたのですが、そのあたりは本当に難しいと思います (S) / (コミュニティ全体がクライアントであるという文脈で) 学会発表とか論文にする段階で、こういうことで報告をさせていただきたいという了解を誰にとればいいのか、というところで詰まっています (S)	6	
教育・研究活動の成果を示す難しさ		教員系カウンセラー：臨床と研究の両立	教職課程と相談室の両方に書くエネルギーがなく、非常勤カウンセラーも他の仕事をもって、紀要にしたり時、どれだけ研究という形をとるものが載せられるかという不安が先に立っています。エネルギーが、スタッフや体制を安定させることに注がれていて、まだ紀要化はできないと考えると (S) / (他教員と同様のノルマを課されて相談業務に携わるのは正直、非常にきつい。完全にオーバーワークで、バーンアウトの危険を感じる。ただしやりがいはいはあり、実践と研究のつながりが感じられる (F)	5	16%
		学生相談の成果を示す難しさ	事務の人は、内容よりも「何人来ていたのか」「どれくらい利用されているのか」ということを大きく評価されますので、やはり、仕事ぶりをちゃんと見せなければいけない (S) / 学生相談を通じて見えてくる学生像を、大学にフィードバックしていくことが、学生相談の機能として大事になってくるだろうと思うんです。(略) こちらからフィードバックするとき、どんな学生が来ていますかという話にすぐくなるんです。こういう学生が来て困っていますというところではコミュニケーションしにくくて、もう少し抽象度の高いところでお伝えしたい (S)	4	
				53	

合 計

(註) コード例の文章末尾の記号は、(S)：「学生相談シンポジウム」、(W)：「私の学生相談」、(F)：自由記述からの抽出を示す

表 4 「現在の組織的立場があなたの学生相談活動に及ぼしている影響はどのようなものですか？」への回答

雇用形態	回 答 内 容	回 答 例	コード数
非専任	モチベーション低下	非常勤雇用であることはモチベーションを下げる／待遇の悪さ、身分の不安定さにモチベーションが崩されることがある／3年任期、卒業まで見届けられない残念さ、学生・保護者への申し訳なさを感じつつ活動しており、モチベーションも下がる	5
	発言権の弱さ	会議には参加できず、学生サイドの意見を十分に伝えられない／専任スタッフに意見を言いつらい／どのような人材が上にいるのか、大学は考えてほしいが、嘱託 Co の身分ではいかんともしがたい。	5
	時間的制約	勤務日数が少ないと連携を取りにくく時間が合わない／学内関係者も、時間に縛られる非常勤よりはある程度都合のつけやすい専任に相談しやすいと感じている。	2
	退職に伴うケース引継・中断	契約満了期間の少なくとも1年前からは終了を意識した学生支援をせねばならず、発達障害や重い病理を抱えた学生については引継に伴う負担も懸念している。	2
	専任的役割を担うことへの疑問	責任者がいない状況の中、臨床心理士の中では私が年長ということで、障害や疾患の重い学生について最終判断をすることが多い。しかし、週1回の勤務で責任ある言動を取ることに疑問を感じている。	2
	週5日勤務の連携しやすさ	週3日勤務の時と比べると週5日の時には職員との横のつながりが公私ともに築けた。顔と人柄が互いにわかっていることで仕事は格段にしやすい。他部署・教員・保護者などと連携の機会が増えたこともよかった。	1
	学生との支援関係が守られる	職員との関係に難しさはあるが、学生とのカウンセリング関係が守られるという面もある。	1
専任	発言権があり、大学組織にアプローチできる	全学の学生支援委員会などへの出席、動きやすさ／新しい取組みなどは専任という立場からの方が提言しやすい／仕事は増えるが組織全体に働きかけられる動きがとれるようになった／大学での貢献度や認知度は高い。	5
	大学の一員になった感覚	雇用が安定した専任になったことで、大学の一員として腹がすわったと感じる。	1

(1) 学生相談カウンセラーの困難の特徴

① 教職員との学内連携に伴う困難：心理臨床家の困難の一つとして、クライアントとの二者関係において生起する「心理療法関係の困難」があった。これに対して、本研究は学生相談に固有の《実践》に伴う困難として【枠組みのゆるさと青年期臨床のはげしさ】を見出した。学生相談の支援対象となる学生は高い心的エネルギーや多様な問題を発達的特徴とする青年期 (Coleman & Hendry, 1999) である。加えて、大学コミュニティの中にある相談室という構造上、心理療法的な二者関係の枠組みの保持はきわめて困難である (山木, 1990)。この特徴を背景に、学生相談カウンセラーは【個別支援か組織的支援かの葛藤】や【教職員の理解を得る難しさ】を経験する。つまり、学生相談カウンセラーは「心理療法関係の困難」を超えて、学内組織や教職員との関係による困難を特徴的に経験していると考えられる。

また、《組織》に伴う困難には、内野・森田 (2012) や坂本 (2012) らが指摘する困難を支持

するカテゴリが得られた。**【学生相談機関としての未成熟さ】****【事務系・非常勤カウンセラーの動きづらさ】**は組織的な足場の弱さに関わる困難である。**【教育・研究活動の成果を示す難しさ】**は、足場固めの方法に関連する困難として捉えることができる。このように学生相談カウンセラーの困難が《実践》《組織》から構成されているとすれば、困難体験を最も際立たせるのは、双方の領域が重なり合うことになる学内連携活動である。学内連携に伴う困難は、〈学生の行動化による疲労困憊〉に示されるような病理性・事件性の高い事例であるほどに際立ち、「心理療法関係の困難」をさらに先鋭化すると考えられる。

一方、心理臨床家の「社会・経済的困難」や「心理臨床家個人の困難」に該当するカテゴリは抽出されなかった。これらに関連して、〈非常勤カウンセラー：モチベーション低下〉〈私立大学、非常勤カウンセラーの雇用問題〉などは存在したものの、最終的に**【非常勤・事務系カウンセラーの動きづらさ】**というより上位のカテゴリに集約され、実務への影響を強調した困難として位置づけられた。本研究の質的素材に、社会的望ましさの影響を受けやすいシンポジウム場面における発言や公刊論文を選定したことの影響もあるだろう。総合的に考えると、学生相談カウンセラーの「社会・経済的困難」や「心理臨床家個人の困難」は潜在的に存在していると推測され、調査対象や方法を変えることで明らかになる可能性はあると言える。

② ‘理想的な’学生相談機関と現実との乖離に伴う困難：次に、《組織》をめぐる困難の発生機序に着目したい。《組織》に伴う困難な主観的体験を示す**【学生相談機関としての未成熟さ】****【事務系・非常勤カウンセラーの動きづらさ】****【教育・研究活動の成果を示す難しさ】**には、その背景として学生相談機関への‘理想的な’イメージが想定される。具体的には、学生相談カウンセラーが**【学生相談機関の未成熟さ】**を感じるに至る背景には、成熟した学生相談機関のイメージとして、「大学組織における管理運営上、組織の独立性・中立性を確保することが望ましい」（日本学生相談学会，2013）という理想があると推測される。同様に、**【事務系・非常勤カウンセラーの動きづらさ】**の背景には、「教員系・専任カウンセラー」（日本学生支援機構，2007）という望ましい組織的立場が推測される。**【教育・研究活動の成果を示す難しさ】**の背景には、日本学生相談学会（2010：p. 272-289）が指摘するように、教育・研究活動の成果を示すことは学生相談カウンセラーのアイデンティティ形成や高等教育、社会全体への貢献にもつながるという理想イメージがあると推測される。このように、《組織》の困難カテゴリはすべて、学生相談カウンセラーが‘理想的な’イメージを意識し、現実との乖離を認識したときに生じる側面があると考えられる。長年の実践と理念研究（都留ら，1994；齋藤，1999）によって導き出されたこれらの‘あるべき姿’は、いわば灯台の光のごとく、現場の学生相談カウンセラーにとって実践の拠り所となっているように思われる。そのため、示された航路から逸れたとき、「本来はこうであるべきなのに実際はそうできていない」という主観的体験が生じやすいのかもしれない。特に、

‘理想的な’状況から離れた学生相談カウンセラーであればあるほどに、自己肯定感が維持できず、無力感やモチベーションの低下を併発する可能性もあると考えられる。

(2) 質問紙調査の回収率の低さについて

今回、質的データを補強するために郵送・匿名による質問紙調査を実施したが、回収率は19.1%と低く留まった。その原因を探索するために、質問紙を配布した学生相談セミナー参加者の内訳を検討した。セミナー当日、全員に配布された参加者名簿と日本学生相談学会の会員名簿を参照したところ、参加者115名のうち70名について組織的立場に関する情報を得ることができた。70名の内訳は、専任47名（兼任・兼担10名を含む）、非専任20名、不明3名であった。残り45名の詳細は不明であるが、学生相談に直接従事しない一般教員や事務職員がFaculty DevelopmentやStaff Developmentとして参加する場合もある程度想定される。そのように仮定すると、それらの参加者は自分が調査対象ではないと捉えたことが一つの要因として考えられる。また、調査対象となる学生相談従事者であっても、研究対象が困難体験ということから、対象者自身の心理的抵抗や恥の意識（岩壁，2007）が喚起され、返送まで至らなかったことも一因として考えられる。

ただ、自由記述回答が得られた17名中12名（71%）が非専任者であったことは、研究協力の動機に差があったと推測される。研究協力者の動機づけについて、岩壁（2010, p. 87）は「誰かに私の体験を理解してもらいたい」「このような問題を解決してほしい」「研究者に自分の代弁者として、学問的地位を利用してこの問題について訴えてほしい」などの関心が高い場合に研究協力が得られやすいことを指摘している。困難を明らかにしようとする調査において、専任カウンセラーよりも非専任カウンセラーからの研究協力が多かった事実は、組織的立場の不安定さによって困難が大きくなるという本研究の結果を支持するものである。しかし、困難体験を対象とした調査に質問紙を用いることは、研究協力者の内発的動機づけや心理的抵抗に依存する面が大きい点で限界があるといえる。

(3) 本研究の限界と今後の課題

本研究では、学生相談カウンセラーに特徴的な困難を探索的に検討した。その結果をまとめると、おおよそ図1のようになる。すなわち、困難の構造は《実践》に伴う困難と、それを先鋭化する《組織》に伴う困難との関係によって説明でき、特に困難が顕在化する事象として学内連携が想定された。また、《組織》に伴う困難は‘理想的な’学生相談機関と現実との乖離によって増大する可能性についても示唆を得た。このように本研究は、学生相談カウンセラーの困難について新たな知見を得た点で一定の意義を有するが、いくつかの限界もある。

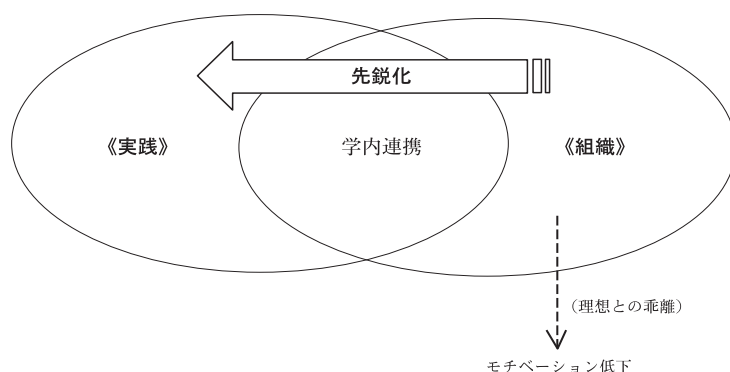


図1 学生相談カウンセラーの困難の構造

まず、今回の分析に用いた質的素材は、公刊された図書や論文であり、多数の関係者に読まれることを想定して書かれた署名付きのデータという点である。シンポジウムという公の場において求められる発言の社会的望ましさの影響や、自伝的資料にみられる誇張・削除・歪曲（名島，2001）の可能性を留意しなければならない。また、データ分析においては、複数の評価者でチェックを行い、自由記述を追加してカテゴリの安定性を確認して質的分析の妥当性を検討したが、カテゴリを構成するコード数にばらつきがあり、全体として十分に飽和（岩壁，2012）しているとは言えない。困難の内容や構造を明らかにする探索的研究としての目的は達成できたが、より深い体験を得るためには、さらなる研究が必要である。

今後の課題は以下2点である。第一に、学内連携に伴う困難と対処をより細やかに検討することが必要である。困難な学内連携事例について、これまでの学生相談研究は一事例研究が中心であり（例えば山木，1997）、実証的研究を基にした学生相談カウンセラー全体のメタモデルは得られていない。今後は、学内連携に伴う困難を臨床の必要性の高い課題として明確化し、対処方略モデルを明らかにする必要がある。特に、【枠組みのゆるさと青年期臨床のはげしさ】があるなか、【個別支援か組織的支援かの葛藤】や【教職員の理解を得る難しさ】といった《実践》に伴う困難をどのように克服するのか、また【学生相談機関としての未成熟さ】や【事務系・非常勤カウンセラーの動きづらさ】を体験している学生相談カウンセラーがいかにしてその困難を対処するのか、具体的な対処方略を見出すことが喫緊の課題である。

第二に、‘理想的な’学生相談機関と現実との乖離がモチベーション低下につながる可能性を精査し、その対処を検討することが必要である。理想イメージとは程遠い立場にいるカウンセラーが、いかにその距離の大きさに圧倒されないようにするのに留意した研究を進め、組織的立場に関する知見を均衡化する必要がある。具体的には、教員系や専任の立場にいるカウンセラーのメリットを強調するだけでなく、固有の困難をも十分に明らかにし、それとの対比において事務系や非常勤カウンセラーが実務上どのようなメリットがあるかを比較した研究が必要である。

例えば、教員系カウンセラーの多重関係（金沢ら，1996）や、教員という‘権威’が学生支援に及ぼす影響について検討する必要がある。教員は、学生の立場からみると、より高い地位や能力、判断を持った上位者であると認識されやすい立場にいる。教員という地位を持ち、授業を担当するカウンセラーが学生にどのように認知され、いかなる影響を与えるのか、学生目線からのプロセス研究（岩壁，2008）が必要である。例えば、学生相談において、学生がカウンセラーを呼ぶとき、「～先生」から「～さん」へと呼称が変化することがある。これは支援の関係性が「タテ」から「ヨコ」に変化したときに生じる現象と考えられる。心理療法研究における権威への追従 deference（Rennie, 1994）にも関連したテーマであるが、学生相談領域における実証的研究は着手されていない。

今後はそれぞれのテーマ別に、多様な組織的立場のカウンセラーやクライアントである学生を対象にしたインタビュー調査を行い、仮説モデルを生成することが求められる。その際は匿名性を保持し、データの信憑性を高めることに十分留意すべきである。これらを解明することは、学生相談カウンセラーの組織的立場に対する自己肯定感や現実検討力を高めることに役立つ。また学生相談カウンセラーの職業的発達と学生相談機関の発展を推進することにもつながる。

付記：本稿は、第30回日本心理臨床学会における発表内容に加筆・修正を加えたものである。なお、本研究は2010年度日本学生相談学会推進研究の補助を受けて行われた。

文 献

- Coleman, J. C. & Hendry, L. B. 1999 *The Nature of Adolescence (3th Edition)*. London: Routledge.
 （白井利明・若松養亮・杉村和美・小林亮・柏尾眞津子訳 2003 青年期の本質. 星和書店.）
 Corey, M. & Cory, G. 1998 *Becoming a helper (3rd Edition)*. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole. （下山晴彦（監訳）堀越勝・堀越あゆみ・古池若葉・中釜洋子・園田雅代（訳）2004 心理援助の専門職として働くために：臨床心理士・カウンセラー・PSW の実践テキスト. 金剛出版, 148-218.）
 Farber, B. A. & Heifetz, L. J. 1981 The satisfactions and stresses of psychotherapeutic work: A factor analytic study. *Professional Psychology*, 12, 621-630.
 乾吉佑 2006 臨床心理士の適性. 6(5), 629-636.
 岩壁茂・金沢吉展 2006 心理臨床家の職業的発達に関する調査から：(2)心理臨床家の直面する困難とその対処法について. 日本心理臨床学会第25回大会発表論文集, 235.
 岩壁茂 2007 セラピストの欲求. (岩壁茂著 心理療法・失敗例の臨床研究：その予防と治療関係の立て直し方. 金剛出版, 89-114.)
 岩壁茂 2008 プロセス研究の方法. 新曜社.
 岩壁茂 2010 はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究：方法とプロセス. 岩崎学術出版.
 金沢吉展・沢崎真史・松橋純子・山賀邦子 1996 学生相談における職業倫理：日本学生相談学会会員の調査結果から. 学生相談研究, 17(1), 61-73.
 川喜多二郎 1970 続・発想法——KJ法の展開と応用. 中公新書.
 Kramen-Kahn, B. & Hansen, N. D. 1998 Rafting the rapids: Occupational hazards, rewards, and

- coping strategies of psychotherapists. *Professional Psychology: Research and Practice*, 29, 130-134.
- 名島潤慈 2001 歴史的人物の事例研究. 山本力・鶴田和美編著 心理臨床家のための「事例研究」の進め方. 北大路書房, 100-107.
- 日本学生支援機構 2000 大学における学生生活の充実方策について：学生の立場に立った大学づくりを目指して.
- 日本学生支援機構 2007 大学における学生相談体制の充実方策について：「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」.
- 日本学生相談学会 2010 学生相談ハンドブック. 学苑社.
- 日本学生相談学会 2013 学生相談機関ガイドライン.
- 能智正博 2011 質的研究法. 東京大学出版.
- 岡本かおり 2007 心理臨床家が抱える困難と職業的発達を促す要因について. *心理臨床学研究*, 25(5), 516-527.
- Orlinsky, D. E., Rønnestad, M. H., Ambühl, H., Willutzki, U., Botersmans, J., Cierpka, M., Davis, J. & Davis, M. 1999 Psychotherapists' assessments of their development at different career levels. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 36(3), 203-215.
- Pope, K. S. & Tabachnick, B. G. 1993 Therapists' anger, hate, fear, and sexual feelings: National survey of therapist responses, client characteristics, critical events, formal complaints, and training. *Professional Psychology: Research and Practice*, 25, 247-258.
- Rennie, D. L. 1994 Client's deference in psychotherapy. *Journal of Counseling Psychology*, 41, 427-437.
- 齋藤憲司 1999 学生相談の専門性を定置する視点：理念研究の概観と4つの大学における経験から. *学生相談研究*, 20(1), 1-23.
- 坂本憲治 2012 学生相談カウンセラーの職業的発達に関する質的研究：「私の学生相談」を素材として. *学生相談研究*, 32(3), 187-200.
- 佐藤郁哉 2008 質的データ分析法——原理・方法・実践——. 新曜社.
- Skovholt, T. M. & Rønnestad, M. H. 1992 Themes in therapist and counselor development. *Journal of Counseling & Development*, 70, 505-515.
- Skovholt, T. M. & Rønnestad, M. H. 1995 *The evolving professional self: Stages and themes in therapist and counselor development*. Chichester, West Sussex, UK: Wiley.
- Stevanovic, P. & Rupert, P. A. 2004 Career-sustaining behaviors, satisfaction, and stress of professional psychologist. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 41, 301-309.
- 田所撰寿・小嶋明子・松本浩二 2004 心理臨床家のキャリア形成に関する研究：若手を対象とした意識調査から. 明治学院大学心理臨床センター研究紀要, 2, 55-74.
- 都留春夫・小谷英文・平木典子・村山正治 1994 学生相談：理念・実践・理論化. 星和書店.
- 鶴田和美・齋藤憲司 2006 学生相談シンポジウム：大学カウンセラーが語る実践と研究. 培風館.
- 内野悌司・森田裕司 2012 全国学生相談機関調査の活用方法：2009年度調査の自由記述にみられる課題意識の分析を通して. *学生相談研究*, 33(2), 164-179.
- 山木允子 1990 大学学生相談室における精神療法. 岩崎徹也(編) 治療構造論. 岩崎学術出版社, 490-505.
- 山木充子 1997 重症例を抱えるためのネットワークの重要性・そのⅠ：臨床心理士の立場から. *学生相談研究*, 18(1), 20-24.